

# ライブラリー 通信

LIBRARY NEWS

TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN  
LIBRARY NEWS

発行:東北芸術工科大学図書館

tel. 023-627-2044

fax 023-627-2085

mail : library@aga.tuad.ac.jp

平成20年7月10日 No.25

2008. summer

[夏真っ盛り号]

## 名画「車窓風景」を楽しもう!

建築・環境デザイン学科 准教授 志村直愛



というタイトルであるが、図書館やレンタルショップで探してもそんなビデオもDVDもない!これは、「列車の窓」というスクリーンに展開するまちや自然の風景のことである。移動する列車の窓から見る風景は実に魅力的。黙って座って眺めているだけで、まるで映画のようにどんどんシーンが変化していく。それは私たち建築や環境を学ぶ者にとって新鮮な発見や驚きに満ちた活きた教材でもあるのだ。

芸工大の専任勤務となって三年目。東京からの新幹線通いは大変ですね……とよく言われるのだが、いえいえとんでもない!建築や都市の歴史を専門とし、さらには根っからの鉄道少年だった私にとっては、遠足のようなわくわく気分、未だに毎週何らかの新しい発見がある車窓風景を堪能する日々である。

東京からつばさに乗り込むと、まずは左右どちらの窓際に座るかが悩みどころ。今日は吾妻連峰の残雪を確かめるか、赤湯烏帽子山の桜を愛でるか……、これから三時間弱、東京、埼玉、栃木、福島、山形と一都四県に跨がって展開する名シーンをいかに楽しむか、計画的に座席を選ぶ。静かにホームを滑り出すと、最先端の超高層ビル群の間を縫うようにくぐり抜け、秋葉原の賑わいを眺めつつ一端地下に潜って上野。日暮里から外へ出ると一軒下町の低層住宅密集地を見ながら走る。この先手は旧荒川が創り出した広い低地帯、

左手は川が削り残した武蔵野台地の最東端で、上野山、飛鳥山と標高二十メートルレベルの台地が連なる。つまり線路がちょうど下町と山の手の境目に敷設されているという都市構造も高架の新幹線からは容易に見て取れる。隅田川を渡ると、天気によければ右手には遠く筑波山が、左手にはなんと富士山がくっきり見えるのだ。富士山は東海道新幹線の専売特許と思いきや東北新幹線からも案外よく見える、しかもなんだか意外な方向に……。富士山はずっとつばさを見送ってくれ、空気の澄んだ日には驚いたことに宇都宮からも見えるので注目だ!大宮から先は一気に森と農地が目立ってくる。中でも青緑色に目立つのが埼玉名産長ネギ畑。その間を埋めるように新興の戸建て住宅が建ち並ぶ。最近では時折高層マンションも見られるが、これが見えたら高架下に来る線の駅があると思えばいい正解!駅圏と地価の関係が目に見えて解る。栃木に入ると、農家や蔵、小屋といった伝統的な建築が俄然面白くなってくる。これらにはその土地ならではの意匠や材料、地方色も出てくるのだ。宇都宮が近づくと灰白緑色の蔵や倉庫が目立ってくる。これは近所の

大谷で採れる凝灰岩、大谷石を用いた建築。郡山では赤褐色の瓦屋根が目立ってくるし、



その先福島に向けていくつものトンネルを出入りする間に、赤や銀のトタン板が張られた急勾配屋根の農家が増えてくる。明らかにかつて茅葺き造だった農家建築群が未だに健在なのである。

時々渡る川も大蛇行が目立ちはじめ、自然風景も東北らしい壮大なスケール感になってきた。いつの間にか畑より田んぼが増え、広大な農地の真ん中に時折ぼつんと立つ耕地整理の記念碑に、未開の土地を切り開いた先人達の苦勞をも窺うことができる。

福島を出て奥羽本線区間に入ると、土木構造物に注目だ。福島米沢間の板谷峠越えでは、急勾配を登坂するためのスイッチバックの痕跡が有名だが、沿線のトンネルや橋、駅のホームなどにも古い石積みや煉瓦造の建造物が見られる。山形県内に入れば、明治初期の県令三島通庸時代の石造眼鏡橋が、赤湯とかみのやま温泉の間に二つ見られるのだがみなさんお気づきだろうか?

こうして東京から山形まで、延々と車窓風景を眺めていると、ローカル度、あるいは東北度みたいなものがグラデーションを描くように次第に高まっていくのが実感できる。その正体は自然の濃さや建築の伝統性、風景のどこかさといったものらしい。そして、それは非常勤で山形に通い始めた九年前より明らかに減少していると感じる。あと十年、二十年経ったら車窓のシーンはどう変わるのだろう。やがて山形も東京と変わらぬビル街の連続となり、沿線の眺めも全線均一の住宅地一色に……そんな退屈な映画になってしまうのか……。

……いつの間にか眠っていた私は悪い夢から覚め、ふと気がつく。車窓には残雪が眩しい蔵王連峰と、いつもと同じ見慣れた山形の市街地のシーンが流れている。今日の上映時間もうすぐ終わりに近づいた……。

あ、肝心の烏帽子山の桜を見忘れてしまったではないか!

# 新着図書から

## 「巨大バツタの奇蹟」

●室井尚

アートン T121=Hロイ

まったく偶然の巡り合わせなのだが、五月の連休に、水戸芸術館で開かれた宮島副学長の個展を観に行ったときに、巨大なバツタのバルーンがフカフカと正面の広場に佇んでいて、子どもたちが元氣よく体当たりしたり、飛び跳ねたりして遊んでいる風景に出会った。二〇〇一年の第一回横浜トリエンナーレで話題になった、「あのバツタ」だというのは何となく分かったのだが、その詳細については、恥ずかしながらほとんど知識がなかったのだ。そして、その仕掛け人の椿昇氏と室井尚氏のトークショーに参加して、ようやく、当時のアートプロジェクトとしての面白さと凄まじさの正体を知ることになり、そのインパクトの強烈さに、それからしばらくの間、あのバツタの姿が頭から離れなくなってしまう。

本書は、ひとつの国際アートイベントにおける、ひとつのアートプロジェクトの、着想から企画、準備、設営にいたるまでの、じつに生々しいメイキング・ドキュメントである。生々しいというのは、プロジェクトの予算規模から、様々な人たちの複雑な利害関係から、資金のやり繰りやら、最後には施工業者が逃げ出して学生たちが力を合わせてカバーしたなど、ここまで暴露しているのだから。こうしたひと塊のプロセスの顛末を時系列とともに追いかけていくと、ひとつのドラマをワクワクしながら客観的に見ているのと同時に、自分が登場人物の誰かと同じ立場になったときのシミュレーションとして、当事者の目で冷静に見てしまう側面があることに気づく。特に興味深いのは、学生(美大生に限らず)

が、昨今のこうした国際的なアートイベント運営に欠かせない存在になってきていることであり、その役割の重要性が、アーティストにも主催者側にもよく認識されていることだろう。規模の大小に関係なければ、誰にでも何かのプロジェクトに関わる機会は、これまでも、今現在でも、そしてこれからいくつでもあるだろうし、いつ自分がどの立場になるかも分からない。そうした意味からすると、本書は、学生だけでなく、教員や職員にとつてのテキストでもあるといえるわけだ。

それにしても、この巨大バツタの周りで走り回っていた子どもたちの生き生きとした姿を想い起こすにつけ、本学でも子どもたちがいつでも集える「何かフカフカした巨大な物体」が、正面広場にあつたらいいなと思つたりした。誰かやってみないか……大変だけど。

(図書館・美術館大学構想室 加藤芳彦)

## 「砂の女」

●安部公房

新潮社 918.68=AB116

この本を読んだのは、確か大学二年生の頃だったと思います。安部公房の世界感に惹かれて大学に入り何冊か読んだ中の一つです。

この『砂の女』は、主人公の男性が砂丘へ昆虫採集に出かけ、砂穴に生活する部落に迷い込み、不法監禁とも言えるような手段で部落に留まらざるを得なくなる。そして男は何度も何度も、あらゆる手段で脱出を試みる。引き留めようとする砂穴に生活する女と愛郷精神の部落の人々。男の葛藤と計算、異常な状況においての自己分析。そして他人を観察する男の、日常の人間関係や部落の人々の言動や行動。

男の挑戦や精神状況が、当時の私には、自分がこれから進もうとする厳しい美術の世界で乗り切るための一例のような気がして、どんどん引き込まれたのです。そして、非日常的な設定と描写で、大学生の自分には異質

で見た事もないような事象なのに、安部公房の言葉のパズルが、私の想像力のスイッチを押してくれました。

まるで自分が主人公の男になったかの様な視点での映像が、読み込む言葉から自然と湧き、目は文字を追っているのに頭の中には映像が流れるのです。普段キャンパスや絵の具等を使い、自分の中の映像を静止画像として表へ出してしている自分には、とても不思議な経験でした。もちろん他の本などでも映像は浮き上がりますが、ここまで映像として成り立つ本は自分には無かつたのです。

今回また読み返してみました。湧き出る映像は全く変わっていません。むしろ自分の人生経験や見聞が増えた分、頭の中の映像の描写が細かくなりました。

この本は映画化もされています。それを知ったのはちょうど、本を読んだ年と同じ年に、たまたま見ていた雑誌に紹介されていたからです。監督は誰か忘れてしまいましたが、故・岸田今日子主演のモノクロ映画。その紹介に使われていた映像の断片が、まさに私の頭の中の映像そのものだったので。一人で大興奮したのをいまだに覚えています。

そして卒業後、私は砂の女の景色がどうしても忘れられなくて、見てみたくて、鳥取砂丘に行つてしまいました。自分も穴に落ちたかどうかという不安を抱きながら。

(美術科洋画コース副手 大浦和代)

## 「強く生きる言葉」

●岡本太郎・岡本敏子

イーストプレス T59=THHE1

ページを捲った瞬間に、私の目に飛び込んできた。岡本太郎の言葉が。

「こんなに弱い、なら弱いまま、ありのままに進めば逆に勇気が出てくるじゃないか。もっと平気で、自分自身と対決するんだよ。その時の自分が一番必要としている言葉だった。それから一気に、この本の世界に入り込

んでいった。あつという間に読み終えて、もう一度、今度は表紙から、ゆっくり噛み締めるように最後まで読み返した。それを何度も繰り返した。もう十数回読んでいる。自分の手もとにずっと置きたい。折々に開いて読みたい。そんな大事な本になつていった。

この本は、岡本太郎が普段の生活の中で、ふと漏らした言葉を、太郎のパートナーの岡本敏子さんが書き記したものである。あとがきのなかで、敏子さんは書いて、「太郎が漏らす言葉は、ユニークで、とても面白い。私はくっついて歩いて、一言も聞き漏らすまいと、しょっちゅうメモをとっていた。彼の生き方の筋は一貫しているから、まとめて読み返すと独特の哲学、人生論になつていく」。

どのページを開いても、勇気づけられたり、励まされたり、優しい気持ちになつたり、自分のいい加減さに気付かされて情けなくなつたり、元氣になつたり、気持ちが激しく揺り動かされる。言葉が、「心に染み込む」のではなく「心に焼きつく」感覚なのだ。言葉が生きている。生きている言葉のなんと力強さ!

敏子さんは、最後にこう結んでいる。「太郎の言葉は、どつちを向いて歩き出したらいいか解らない、途方にくれた人々を力づけ、勇気を与えるにちがいない。元氣な人は励まされてもっと元氣に、愛のある人はもっと優しく、それぞれに、いのちを輝かしてほしい」。まさに、そのとおり。人生を輝かせる力になつてくれる一冊だと思える。

図書館では、この本のほかに、同じシリーズで「壁を破る言葉」「愛する言葉」も所蔵している。ぜひ、あわせて読んでほしい。最後に、この本のなかで最も岡本太郎らしい言葉を記したい。

危険な道をとる。  
いのちを投げ出す気持で、自らに誓つた。死に直面する以外の生はないのだ。その他の空しい条件は切り捨てよう。そして運命を爆発させるのだ。

(図書館 谷川佳代子)

# Information

ガレリア・ノルド／スタジオ144／AVルーム

## Galerie Nord

- 7/7(月)～7/12(土)  
「ドリー・ドリーム」(日本画4年/永縄・加藤)
- 7/14(月)～7/26(土)  
「CGとワタシ」(映像コース西村ゼミ)

## Studio144

- 6/30(月)～7/12(土)  
「大学院レヴュー」  
※この期間に予定されていた企画は後期に変更になりました。
- 7/14(月)～7/26(土)  
「CGとワタシ」(映像コース西村ゼミ)

## AVルーム

- 7/17(木) 17:30～  
ドキュメンタリーフィルム上映会-52  
「極北のナヌーク」

平成20年度後期の展示施設の利用については、7月7日から7月14日までの期間で申請書を受け付けます。詳細はネットで情報公開しています。問い合わせ窓口は図書館1階のカウンターです。企画を考えている方は、利用期間に留意し、積極的に応募してください。

## 夏季休業中の開館日程について

日	月	火	水	木	金	土
7/27	28	29	30	31	8/1	2
※3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31	9/1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	10/1	2	3	4

8/4(月)から夏季休業期間に入り、開館時間が短縮になりますので留意ください。

### 開館時間

- 8/1(金)までと9/29(月)以降の月～金 9:00～20:30
- 8/2(土)と10/4(土)および8/4～9/26の月～金 9:00～17:00
- 9/20(土)と9/27(土) 9:00～12:00
- 日曜・祭日と夏季休暇中の土曜日および8/11(月)～8/15(金)の一斉休館日 休館
- ※8/3(日)オープンキャンパス 10:00～16:00

## Topics

### ●水戸芸術館寄贈資料コーナーを設置

6月より、カウンター脇のNADiffセレクションコーナーの一角に「水戸芸術館現代美術センター寄贈資料コーナー」を開設しました。本学総合研究センター主事の樋口雅子さんが、以前勤めていた同館に話をもちかけて実現したものです。

きっかけは、本学の学生のひとりから、「プロジェクトや展覧会のカタログを作るプロセスを知りたい」と尋ねられ、自前のカタログを見せながら経験を話しているうちに、多くの学生も自由に見ることができればいいと考えたことから。宮島達男副学長やグラフィックの近藤一弥教授らとの関わりが強かったこともあり、同館では本学への展覧会資料の提供を快諾。さっそく開館当初からのカタログ約50点が届き、本学図書館のコレクションに加わりました。

水戸芸術館は1990年にオープンしたコンサートホールや劇場もあわせ持つ複合芸術施設で、現代美術センターでは会場貸しは行わず、独自の企画で現代美術の展覧会を展開しています。茨城の大学に

通り、開館当初からアルバイトで展覧会運営に関わっていた樋口さんは、学芸員とは違う教育プログラムコーディネーターという立場で、「美術館を楽しむ」ことを念頭に、ワークショップの企画・制作をしてきました。

カタログ制作では、水戸芸術館でしか観ることのできない展覧会の臨場感をどのように伝えられるのか。積極的なアイデアを盛り込むため、さまざまな視点を持ったデザイナーや編集者にチャレンジしてもらった機会にもなっているそうです。

また、展覧会をゼロから創りあげるには、電源を埋め込んで見えなくする工夫から、自然光を使った照明の微調整にいたるまで、美術館の持つ機能を最大限に活用するスタッフの叡智が結集されます。

「水戸の展覧会カタログをシリーズで見ることで、展示ごとに空間を変化させているギャラリーの様子や、その準備のために裏方で起きていることを想像する手助けになればと思います。アーティスト、デザイナー、編集者、コーディネーターなど、さまざまな立場でアートに関わるみなさんへの足掛かりとなれば」と、樋口さんから資料の活用についてメッセージをいただきました。

### ●NADiffセレクションの映像資料

ライブラリー通信No.23(2月1日号)でも紹介した「NADiffセレクション」の一環でリストアップした映像資料が、2階AVコーナーの棚に並んでいます。主に現代アートを中心とする約150タイトルのDVD(数本のビデオ・CD-ROMを含む)が新たにコレクションに加わりました。今年度も引き続き、映像資料も受け入れていきますので、どうぞご期待ください。

### ●TUAD図書館アンケートの実施について

本学の図書館をより充実させ、使いやすくするために利用者アンケートを実施しています。

みなさんからお寄せいただいたご意見は集計後、大学のホームページとライブラリー通信で公表すると共に、図書館の改善計画作成などに活用します。ご協力よろしくお願いします。

- ・実施期間：7月10日～8月8日
- ・アンケート用紙設置場所と回収場所：  
図書館カウンター、本館一階学生課前カウンター、本館一階ラウンジ
- ・NETBUS+からも回答できます。  
NETBUS+→コミュニティー→アンケート→TUAD図書館利用者アンケート

# 掲示板

図書館でどんな風に調べ物をしますか？  
図書館の「基礎」編

課題が出ました。先生が参考図書を数冊紹介してくれました……。この時に、「図書館に本があるかどうか」は図書館に行つて調べなければわからない、と思ひ込んでいませんか？あるいは、指定された参考図書だけを調べようとしていませんか？図書館に本があるかどうかは、インターネットに接続できれば、いつでもどこからでも確認できます。本があるかを調べることを「蔵書検索」と呼びますが、検索すると①図書館に探している本はあるか、②似ている内容の本はあるか、③同じ人が書いた本はあるか、がわかります。そして、その本が④今日借りられるのか、⑤図書館のどこにあるのかも確認できます。結果の見方や示された本棚の位置がわからないときは、いつでも職員が案内します。

## ●「読まなければならぬ本」があるとき

蔵書検索の画面には「標題」「著者名」「出版者」を入力する欄がありますが、大抵は「標題」つまり図書の「題名」だけわかれば検索できます。

「題名」だけ、とひと口に言っても、長いものもあれば短すぎるものもあり、題名が長いと、検索するのが面倒くさく感じます。

が、実は検索には題名のうちの一部の言葉だけで十分な場合が多いのです。この原稿を書いている現在、我が東北芸術工科大学図書館の図書の中で最も長い題名をもつのは、恐らく「雨の夜にカサもささずにトレンチコートのを立ててバラの花を抱えて青春の影を歌いながら」悪かった。やっぱり俺……。」って言うてむかえに来てほしい。／イチハラヒロコ著』かと思われれます。例えば

この本を探したいときは、「標題」に「雨の夜」だけで検索できます。

逆に、短すぎる題名は厄介です。例えば『デザイン／日野永一著』。「標題」に「デザイン」だけ入れて検索すると一、三二六件もあります。こんなとき「著者名」がわかれば、「標題」と組み合わせ件数を減らすことができます。あるいは、「標題」の右側をプルダウンすると、「フルタイトル」という項目が選べます。「フルタイトル」にして「デザイン」で検索すると、前後に別の言葉がなく「デザイン」だけを題名とするものを検索できます。

長い・短いによらず、特殊な言葉は検索に有効です。ある日、一階のパソコンの検索結果一覧に学芸員関連の図書が数冊残っていたとき、ブラウザの「戻る」で検索画面に戻してみたら、「標題」に「キュレ」と入力されていました。「キュレイター」でも検索できました。ですが、こんなに短くしても十分検索可能です。この人使いこなしてあるなあ、と感心しました。

## ●目的の本がなかったの別の本を探すとき

似ている分野の本を探す一つの方法として、検索結果の「請求記号」に注目するやり方があります。請求記号の頭の数字部分が分類を表すので、この数字を検索画面の下の方の「請求記号」に入れて検索します。結果一覧は、本棚の同じ棚か比較的近い棚に並んでいる本のリストのような感じになります。この探し方は、「就職関係」「論文の書き方」などイメージしやすく、かつ同じ分野のものが色々ありそうな場合に有効です。先程の長い題名の本は、現代美術に分類されていますが、内容は文字だけの作品で、絵画でも写真でも彫刻でもありません。こうした場合は同じ分野の本という探し方は難しくなります。

同じ人が書いた他の本を探すには、検索条件を「標題」をクリアして、「著者名」を使います。イチハラさんの他の作品は残念ながら見つかりませんでした。

## ●調べたいことがあるとき

（例）山形の古い建物について調べたい……。「調べたいことがあるけれど、適当な本があるのかわからない」というときは、まず調べたい事柄を検索してみます。このときは「山形の古い建物」という言葉のまま検索しても、この言葉が題名に使われている本がなければ何も検索されないのです。調べたい事柄をキーワードで表現してみます。「山形」「建築」「建物」「古い」などなど。

次に、考えたキーワードで検索してみます。「標題」に「山形 建築」のように、単語の間に空白を入れて検索すると、両方の語が題名に入っている図書を探します。「山形 建築」では二件見つかりました。

キーワードの組み合わせを変えても適切な結果を得られなかった場合はほかのキーワードも考えてみます。「山形」→「東北」「みちのく」「東日本」。「古い」→「歴史」「建築史」「伝統」「文化財」「遺産」「明治」「大正」。「建築」→「建造物」。更には、「建築」の中でも「木造」「住宅」「民家」「宿」「学校」など。こうして考えるうちに調べたい事柄がはつきり見えてくることもあるでしょう。検索をためすうちに、結果一覧に「調査」「研究」や「写真」などの言葉が見つかれば、調べたい事柄に近づいてきていると考えられます。

こうしたキーワードの整理は、図書だけでなく論文を探すときにも役立ちます。論文、というときと堅苦しく難しくありますが、図書にまとまる前の段階で公表されているものが論文です。キーワードをもとに探した論文の著者に着目して、さらに別の論文や図書の情報をひきだすことも可能です。論文を探したいときは、蔵書検索システムでは用を足せませんので、これまで何度か紹介してきた、「Cinii」のサイトを利用します。「Cinii」の利用については、ライブラリー通信No.23をご参照ください（ライブラリー通信のバックナンバーはカウンターにあります）。

## 司書るうむ

「人は何のために働くのか。こう問われたら、何と答えるでしょうか。」北尾吉孝著「何のために働くのか」（致知出版社）の冒頭の一節である。現在働いている人、過去に働いたことのある人で、「自分は一体何のために働いているのか。仕事とは何か、という問いかけを一度もしたことのない人は恐らくいないのではないか。たぶん人生のなかで、幾度も繰り返し自らに問い続けているのではないだろうか。そこには、百人いれば百通りの様々な答えがあるだろう。しかし、いくつもあるその答えのなかに、日本人として決して忘れてはならない答えがあるはずである。それは何か。」

著者の北尾氏は言う。「東洋思想では、仕事とは天命に従って働くことだと考えます。仕事という字を見てください。「仕」も「事」も『つかえる』と読みます。では誰に仕えるのかと言えば、天につかえるのです。そして私は、自分の天分をまっとうする中でしか生きがいは得られない、と思っています。」

北尾氏の考えには、反論もあるかもしれない。しかし、時には、働くことについて哲学的に論じている本と向き合い、領いたり、反発したり、感動したりしながら、仕事をとおしての自分の人生や社会のあり方について、これまで以上に、じっくり考える時間が必要ではないだろうか。それは今働いている人だけでなく、就職活動中の学生やこれから就職について考え始める学生にとっても、大事なことであると思う。

次回、十月と十一月の図書館の展示テーマは、「働く」と生きてゆくことを考える。哲学・芸術・歴史・社会学・心理学などの面から、様々な切り口で働くことについて考える本を百冊以上紹介する。ぜひ、図書館に足を運んでほしい。

（図書館 谷川佳代子）